

平成30年度 学校経営計画 足立区立扇小学校

学校長 加納 和彦

1 学校教育目標

○考える子 ○がんばる子 ○助け合う子 ○元気な子

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	○児童・保護者・地域から信頼される学校 ○子供の「心・頭・身体」を育てることを最優先に考える学校 ○教職員だけでなく、各種専門家と共に子供を育てようとする学校
○児童・生徒像	○考える子・・・「言葉の力」を育てる児童 ○がんばる子・・・壁を越えようとする児童 ○助け合う子・・・共生、共育する児童 ○元気な子・・・心身ともに健康な児童
○教師像	○自らの向上を図ることができる教師 ○学校運営に貢献し、主体的な提案ができる教師 ○学校、児童、地域に誇りをもてる教師

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

- 児童
- ・全校朝会・集会では、時間前に整列し静かに座って待つことができる。
 - ・基礎学力定着のための全校的な取組により、学力調査の通過率が向上してきている。
 - ・学習意欲・学習規律・生活指導の面では、組織的な取組が必要な児童が複数名いる。
- 教職員
- ・学校経営計画に添って、一人一人が努力し協力して取組むことができる。
 - ・経験年数が少ない教員が多いが、足立スタンダードによる分かる授業に向けて努力している。
 - ・教員の半数以上が1校目であり、学習指導・校務分掌等において組織的に取組む必要がある。
- 保護者
- ・学校の教育活動に対して協力的な保護者が多い。
 - ・基本的な生活習慣の確立や家庭学習の習慣化等において学校の関与が必要な家庭が多い。
- [前年度の成果と課題]
- 児童
- ・学級経営の安定と個人カルテに基づく補充学習の充実により、学力調査通過率が向上した。
 - ・大勢の前で堂々と発言できる自信や自己表現力を育てることが課題である。
 - ・分かる授業と補充学習等により基礎学力定着を図ることが課題である。
- 教職員
- ・小中連携研究授業・学力定着巡回指導等により、足立スタンダード型授業が定着してきた。
 - ・若手教員が多く経験に基づく提案が少ない。主体的な活動を積み重ねることが課題である。
 - ・授業力・学級経営力を高める指導・助言をする一方で、メンタルケアを継続する必要がある。
- 保護者・地域について
- ・地域・保護者は、挨拶運動・地域行事に協力し、地域ぐるみで子供を育てようとしている。
 - ・PTA活動とくにスポーツや学年活動が活発で、教員と保護者の連携が取れている。
 - ・学校と家庭や地域での子供の様子の違いについて情報交換をし、共通理解する必要がある。

4 重点的な取組事項

番号	内容	実施期間				
		28	29	30	31	32
1	学力向上	○	○	○	○	○
2	自己肯定感の醸成	○	○	○	○	○
3	教員の授業力向上	○	○	○	○	○
4	小中連携	○	○	○	○	○

5 平成30年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上
A 今年度の成果目標		平成30年度区学力調査 目標通過率（学校平均）
児童の基礎的学力の定着を図る		75%以上
B 前年度の取組み内容		
項目	具体的な方策	
足立区学習定着度調査の複数回実施	4月にH29年度問題で調査、10月に再調査、12月にH29年度の1学年上の問題で調査、2月に再調査。	
読書活動の推進	「読書記録カード」で児童の読書記録を管理する。目標達成者を全校朝会で賞揚する。	
補充学習のスタイルの定着化	5月運動会前を第一段階、サマースクール前を第二段階、後期開始を第三段階として、修正し実施する。	
パワーアップタイムと土曜授業日を基礎学力向上の取り組みを明確にする	H28年度新学年・新担任が個人カルテ、学習カルテとリンクさせ実施計画策定、実施。職員共有を図る。	
そだち指導員と学力向上の連携	学力調査の結果分析から、そだち指導候補児童を抽出し、日常テストの分析も加味して、児童を確定し、効果的なそだち指導が実施。	
C 前年度の成果と課題		
<p><成果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・28年度の区学力調査の厳しい結果を受けて、学力向上委員会の機能を高め、補充教室等の学力向上策を工夫して実施した結果、4月の調査においては通過率を20%向上させることができた。 ・学力定着指導員による巡回指導を全教員に対して行い、国語・算数の足立スタンダード型授業について、繰り返し指導することにより若手教員の授業力が向上してきている。 ・4月調査結果から児童個人カルテを作り、主に前学年の学習内容を扱う「B補習」（専科等が中心に行う）と、現学年の学習内容を扱う「A補習」（担任中心で行う）に分け、学校全体で補充学習を充実させた。 ・児童の基礎学力定着に向けて担任と専科教員等が協力して新しい取組を行い、児童の変容が見られたため達成感が得られた。児童は学習に対する楽しさを感じると共に、次の学習への意欲を高める事ができた。 ・5分休みや放課後等、わずかな時間でも担任が臨機応変に補充学習を行い記録することが定着してきた。 ・そだち学習における教材や指導法を担任等が活用することにより補充学習の効果を高めることができた。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校全体の傾向は依然として、漢字や言語事項・文章記述、繰り上がりや繰り下がりのある計算・文章題の題意を正しく読み取り立式することなどである。効果的だった手法を学校全体に拡げる必要がある。 ・30年度から「そだち指導」に加えて特別支援教室による個別指導が始まる。学級での指導の充実につながるように児童個々の実態を細かく分析して、学校全体で指導していくための研修が必要がある。 		
D 今年度の目標実現に向けた取組み		
項目	達成基準	具体的な方策
足立区学習定着度調査の複数回実施と計画的な補充学習教室の実施	10月調査で通過率85%以上、 2月調査で80%以上	4月にH30年度問題で調査、10月再調査。12月に1学年上のH30問題で調査、2月に再調査。毎月、補充学習計画作成。
読書活動の推進	年間読書目標 1～3年80冊 4～6年6,000頁 以上が50%	毎週1回、図書ボランティアを読書指導・読み聞かせ等、読書活動を活発にさせる。また、各学級に図書館の蔵書を巡回貸出するなど、子供が好きな時に本を読んだり・選んだりすることがしやすくなるようにする。
そだち指導員と学習支援員、特別支援教室が連携した個別指導の充実	3・4学年の正答率50～70%の児童全員が、そだち教室を卒業する。	そだち指導員・学習支援員・特別支援教室担当教員が連携して、学習指導方を工夫して指導効果を高め、目標値を達成。

重点的な取組事項－2		児童の自己肯定感の醸成
A 今年度の成果目標		達成基準
児童が自らと扇小に対する自尊感情を育む。		児童による生活がんばりカードやふれあい月間調査で良い項目を70%以上にする。
B 目標実現に向けた取組み		
項目	達成基準	具体的な方策
全校朝会等の場での児童、教職員、保護者の活躍を賞揚	機会があるごとに全校朝会等で表彰、賞賛、善行紹介を行う	児童に加え、保護者、教職員も含め表彰、称揚する機会を全校朝会時に実施。
自己実現・発表の場を設ける。	学級を単位として、全校児童の前で堂々と表現できる。	各学級1回以上、音楽や音読発表など、全校児童の前で表現する機会をつくる。各学級では、発表日に向けて発達段階に応じた表現力の育成に励み、児童一人一人の自己有用感を高めることにつなげる。
外部講師による体験活動を実施。	全学年で1回以上の体験活動を行う。 オリンピック・パラリンピック教育としても外部講師を招聘した体験活動を充実させる。	外部専門家講師による授業を行う。(落語・手話・点字・スポーツ選手等) 東京都や地域の諸団体の出前授業に応募する。 地域の優れた人材を見つけ、講師として体験活動を指導してもらう。
近隣中学生との交流を通じて、学校地域への郷土愛の醸成	児童生徒交流の場を設定	扇っこ祭りへの生徒招待。中学校行事への児童参加を学校間で連携して実施。

重点的な取組事項－3		教員の授業力向上
A 今年度の成果目標		達成基準
足立スタンダードの定着(国語・算数を中心に)		授業の基本形である「足立スタンダード」を全教員が共通実践し、板書や児童のノート指導等を全校統一で行う。
B 目標実現に向けた取組み		
項目	達成基準	具体的な方策
教員に授業公開と指導法の工夫に取り組む。	「足立スタンダード」をもとにした授業を公開したり、参観したりして授業力を向上させる。	年間3回以上の授業観察を基に管理職と学力定着指導員・他の教員が授業観察を行い、授業チェックリストや報告書に基づいて改善させる。
ブロック内で若手研修会の実施	新採教員と5年目以下の教員を対象に授業研修会の実施。	新規採用教員はe-learning、足立スタンダードを研修させる。5年目以下教員は小中連携の授業研究や校内に向けた公開授業を等、年間2回以上実施する。
教育研究会への参加	区小研への参加80%、各年次研への参加100%、区内外の教育研究会等へ2回以上参加	区小研、各年次研参加は原則悉皆。区内外の研究会等への参加を奨励し、教科主任には指導教諭公開授業に参加させる。研修後は校内に伝達講習をさせる。

重点的な取組事項－４	小中連携（扇小-江北桜中、高野小、江北小）	
A 今年度の成果目標 基礎学力の定着をめざした指導法の研修や、生活指導上の課題解決に取り組み、中一ギャップ解消に向けて9年間の学習・生活指導の流れをつくる。また、各校種毎に教員の授業力向上を図る。	達成基準 中学校が統合高校のため、種々の交流の機会を作り、年間20回以上を目標とする。	
B 目標実現に向けた取組み		
項目	達成基準	具体的な方策
小中教員相互の連携	授業力向上のための研修会・授業研究・及び共通課題の解決に向けた研修を年6回以上行う。 また、保健部会を中心にして、生活指導や特別支援に関する情報交換を密にする。	<ul style="list-style-type: none"> ○合同研修会（全体会・分科会・授業研究・共通課題・連絡会）などを行う。児童生徒の実態を知り、指導方法の違いや、教科の系統性や連続性を確認し、それぞれの発達課題を理解した上で、足立スタンダード型の授業ができるようにする。 ○研究授業公開を小中4校が各1回ずつ実施し、各教科領域の相違性や連続性の理解を深め、円滑な接続を目指す。 ○児童生徒の学力の情報を交換し、個別指導に生かす。 ○入学予定児童の状況を伝え、中学校での個別指導の資料とする。生活指導面での円滑な接続を目指す。
児童・生徒の連携	児童生徒の交流を年3回以上行う。	<ul style="list-style-type: none"> ○サマースクール補助に生徒の参加を要請する。 ○小学生が中学校運動会の参観や競技参加できる機会を設定する。 ○小学生が合唱コンクール等、中学校の文化的行事に参観・参加する。 ○生徒会役員が小学校に来校し、学校紹介・説明会を行う場を設ける。 ○部活動体験会に6年生が参加・、体験する機会を設ける。
生活指導の連携	<ul style="list-style-type: none"> ○交通安全・生活安全について小中で共通した指導を行う。 ○課題のある児童生徒を共通理解し、指導に生かす。 	<ul style="list-style-type: none"> ○生活指導部を中心に、発達段階に応じた内容・方法で、統一した指導を行う。 ○定期的に生活指導上の情報交換・合同研修会を行う。
地域やPTAの連携への協力	地域行事、PTA主催行事に児童延べ100人派遣する。また、小中連携講演会等に延べ10人以上の教員を参加させる。	○小中学校PTA主催行事、地域行事に教員、児童を計画的・積極的に参加させ、地域・PTA・教員・小中学生との交流を深め、地域の見守りのもと、小学校から中学校へ円滑に進学できる環境をつくる。